あの風の人に

一さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの風の人に

【Ｎコード】
Ｎ８７４１Ｃ

【作者名】
一さん

【あらすじ】
いつものように目覚めたハヤテ！いつもの日常がくると思いきや、今日、ハヤテにとって二度目になる、「ある体験」をすることに

始まり（前書き）

オリキャラが出ます！
カップリングは決まってません。
物語の始まりが少し長くなりますが、最後までお付き合いして下さい。よろしくお願いします。

始まり

朝の日差しがカーテンの隙間から差し込んでいる。
その窓の向こうに、穏やかな雰囲気に包まれた鳥達が、朝を喜ぶようにヒソヒソと囁き、楽しそうに飛び回っている。
だが、この部屋の主は動き回る鳥達とは逆に、スヤスヤと寝息を立てて安らかな寝顔を浮かべている。
その少女の艶のある金髪が朝の光でキラキラと輝いている。
隣には猫のように丸くなるトラが一匹。
どちらも気持ちよさそうだ。

コンコン

「お嬢さまー！入りますよー！」

部屋の扉を叩いた音の後に男性と思われる声が続いた。
ガチャっという音が少年の侵入を許す。
黒服に包まれたその人が、笑顔のまま自身の主に近づく。

「お嬢さま！朝です。起きてください。お嬢さま～」

少女の肩を揺らしながらその少年は呼びかけた。

「う～ん」

腕を天にあげ、めいいっぱい朝の香りを吸い込む。
その間に、黒服の少年は窓の方に向かい、穏やかな空気と心地よい風を部屋に招き入れる。

「ああ、ハヤテか、おはよう」

「はい！おはようございます！」

寝ぼけ挨拶に気持ちのいい返事。

『ハヤテ』と呼ばれた少年は、笑顔で主の朝を迎えた。

唐突な彼の笑顔に少女は頬を紅く染め、

「お、おぉ」

っと返すので精一杯だった。

っ、っ、っ

廊下を歩く足音が二人分。

先ほどの二人が朝食をとりに向かっている。

一人、少年の名は『綾崎ハヤテ』

水色かかった髪を持ち、女性にも見られるその顔立ちとその笑顔で、何人ものプラグを立てている無自覚天然鈍感ジゴロ。

もう一人の少女は『三千院ナギ』

ハヤテの主にして命の恩人。お金には困らない生活を送り、ゲーム、アニメ、マンガが大好きな天才チビっ子高校生。ＨＩＫＩＫＯＭＯＲＩもち。ハヤテにフラグを立てられた一人でもある。

「昨日はどうでしたか？」

「ん？昨日とは？」

「ゲームですよ、ゲーム。昨日してたじゃないですか」

「あぁ、それかぁ。うむ。昨日は絶好調だったぞ、稀に見るいい選手へと育ってくれた。間違えなく、今までで最高のデータだ」

「そうですか。それは良かったですねぇ」

うむ、っと鼻高々に返すナギにハヤテは少し苦笑する。

（ゲームでではなく、実際のスポーツをしてくれたらいいのに）

そう思う執事は主人の熱のこもった昨日のゲーム話にてきとうな相槌をうつばかりである。

こういう展開の時は決まって、

「で、今日は学校は？」

「いく分けないだろう、そんなとこ」

「いや、ですがお嬢さまは高校生ですし」

「関係ない。そんなことよりゲームだゲーム。今日は野手を育てるぞ」

やるぞー、っと意気込むナギにハヤテはついつい溜め息をこぼす。

（やっぱり）

予想通りのナギの返答に頭を悩ますハヤテ。

主を良い方向へと導くため、執事の苦悩は日々続く。

第一話【えっ、コレって】（前書き）

始まりです

第一話【えっ、コレって】

◆

チュンチュンチュン

鳥達がベランダに止まり、じゃれあうように遊んでいる。

見上げると、どこまでも広がる雄大な青空の中に、気ままに泳ぐ雲が目に映る。

いつもより近くにあるそれは個性豊かで、見る人を飽きさせはしない。

だが、絶景といえるこの景色が見らえるのにも関わらず、この部屋の少女は、窓から離れた位置で机の上に広がる書類とにらめっこをしている。

…

お互いが静止している中、先に動いたのは少女の方。

ガタッという音と共にその少女は額を机上へと置いた。

・・・

しばらくの間、まるで時が止まったかのような、何もない時間が続いた。

それでも、窓から来た風が少女の傍を通り抜け、桃色の髪がユラリユラリと踊っていた。

「ハァ〜」

沈黙を破ったのは少女の溜め息。吐息と一緒に心が漏れるそれには、明らかに悩みが含まれている。

うつ向けの顔を横に反らし、明るくなった視界をまた暗闇へと戻す。

目に浮かぶのは、決まってあの少年の笑顔。

執事服に身をつつみ 、女性ような顔立ちで、自分のことを

「ヒナギクさん」と呼ぶその少年に、少女は少し紅らめる。
少年の顔がどうしても頭から離れない。　おかげで、仕事には手がつかず、時間だけが過ぎるばかり。

「あぁ～、もうっ！」

苛立ちながらに声を上げ、ダンッダンッダンッと机を叩く少女は

「なんで私が！！こんな思いをしなきゃならないのよ！」

っと、怒りをぶつける。
それが、誰のせいで誰に向いてるのか、彼女自身よくわかっている。
もうっ、という言葉と共にまたうつ伏せになる。

「バ～～カ」

それが誰に言ったものなのか…
恋する少女『桂ヒナギク』は今日もまた、一人の少年に悩んでいた。
白皇学院生徒会長の憂鬱は、まだまだ続く。
◇ＨＡＹＡＴＥ
「おはよう、ハヤ太くん」

「おはよ～！」

「フッ、おはよう」

「はい、皆さんおはようございます！」

教室に入るとすぐに、いつもの三人が僕に挨拶をくれた。

ＴＨＡ生徒会の面々である花菱さん、瀬川さん、朝風さんは、三者三様で僕を迎えてくれる。そう、これはいつものこと。この日常が、僕には、ちょっとした楽しみになっていた。

「どうしたぁ、今日は！ギリギリだなぁ～」

「そうだよハヤ太くん、ギリギリギリギリィ！」

「全くだ。黄土色がこれじゃあ、いけないなぁ。…まぁ、聞くまでもないがな！」

「ハ…ハハ」

あれから、何度か誘ってみたものの、結局は無理だった。今ごろはきっと、部屋に閉じこもってゲームに熱中しているだろう。

ふとっ時計に目をやる。

確かにギリギリだ。チャイムがなる五分前の時間を針が指していた。

でも、そんなことよりも、遅れた理由をわかってしまうほうが、僕としてはちょっと悲しい。

ハァ～っ、お嬢さまぁ～～～

「って、ハヤ太くん！何嘆いているのかな」

「あっ、えっ、え～すみません」

くっ、心を読まれてしまった。流石だ！侮れない！

「お～い、席着け～！ＨＲを始めるわよ～」

僕達が話していた間、桂先生が教室に入って来た。

やる気のない顔であくびをしながら教卓の前に立つ。
その様子で、ポリポリと自分の髪をかく桂先生が、とてもヒナギクさんと姉妹とは思えない。
ほんとに、全然似てないよなぁ～っと思うのは、絶対僕だけじゃないだろう。

「失礼ね！綾崎くん！さっさと席につけぇぃ！」

「あっ、はい！すみません！」

えっ！また読まれた！どして。

「アンタ達も早く席に着きなさい！」

「「「ほ～～い」」」！」

桂先生の言葉に軽い返事で従うＴＨＡ生徒会。
気づけば、座ってないのは僕達だけのようだった。
そして、座った後でも、空いてる席が一つある。
これも日常になっているのが、やっぱり悲しい。
ハァ～
っと溜め息がでてしまう。
むっ、ダメだダメだ！執事である僕が弱気になっちゃっダメだ。ＨＩＫＩＫＯＭＯＲＩは僕が治さなければ！
その決心をいつものようにまたして、僕はまた、いつものように桂先生の話を軽く流すことにした。

◆

「もう少しで今日も終わりか～」

今は昼休み、ハヤテはいつものとこで一人時間を潰していた。

人目につきにくく、緑で囲まれた白いベンチがあるここは、ハヤテとナギがいつも一緒に過ごす場所。時々、ヒナギクが部室の近道としてここを通るが、どうやら今日は違うようだ。

「やっぱり、お嬢さまがいないとはりがないなぁ～」

嘆いているようなその言葉も、周りの静寂に溶けていく。
少しの風が彼の髪を流し、穏やかな空気が彼を包み込んでいる。
何もないゆっくりな時間を過ごす今の彼は、そう、幸せなのだ。
思えば、少し前まではこんな余裕を持てる時間なんてなかった。
いつもバイトに明けくれて、身を削る思いで生活費を稼ぐだけが前までの彼だった。
だが、今は違う。
優しいお嬢さまの元、執事として充実な毎日を送っている。まぁ、多少はその主の我が儘のせいで苦労するときもあるが。
それでも、ハヤテにとってはそれを含めて、今の生活全部が幸せなのだ。
この日常はもう失いたくはない。そのためにも、大切なお嬢さまをこれからもずっと守り続けていく。それが今の綾崎ハヤテであり、変わることのない彼の決意なのだ。

「ふぅ～」

息をはくと同時にハヤテは全身の力を抜いて目を閉じた。
それは眠るためではない。このゆっくりとした時間をゆっくりと過ごすためだ。
自然体の彼の雰囲気に誘われて蝶々がヒラヒラと近づいてきた。
彼の頭に乗り、何も動こうとしないその蝶は、まるで母親の胸に抱かれる子供のように、安心して眠っているようだった。
それは、まさに絵になるような光景がだった。

◇???

昼休みも終わりに近づいた頃、今、私はあの人の教室に向かっている。

一歩一歩、足を踏み出すたびに緊張が高まり、心がドキドキする。

そんな状態で私は、今の私を確認した。

ちゃんと整えた髪にクマのないはっきりとした目。

手には昨日、一緒懸命書いた手紙が握られている。

あの人が教室にいたときといなかったときの場合も考えて、どう対応するかも練習した。

うん！大丈夫だ！

今の私ならちゃんとできる。

そう自分に言いきかせ、教室の前まで来た。

一先ずここで深呼吸。

スゥ～ハァ～、スゥ～ハァ～…

教室では、女子や男子やらの声が聞こえる。その中に彼がいるかはわからない。でも、居ても居なくても、私のすることは変わらない。

よし！！っという掛け声を心の中で唱え、ちょっとの勇気をだして彼の教室の扉に手をかけた。

◇ＭＩＫＩ

小さい頃から、あいつは私の憧れだ。

そう、それは今も。

成績優秀で頭脳明晰、男気があって腕っぷしは男以上。

あいつの一つ一つの行動がカッコよく、そのどれもが周囲の視線を集めてきた。

私はそんなあいつが大好きで、そこに嫉妬なんてものが入る余地がないほど、すごくすごく輝いていた。

そんなあいつは、少し変わった。

恋愛なんてものに縁がなかったのに、今ではもう恋をしている。

まあ、本人は隠しているつもりみたいだが、あんなのは誰だって

わかる。
日々を悶々と過ごしながらも、チャンスがあれば少しはアプローチをしているが、当人は一向にその好意に気づかない。
全く、どこかの執事は大がつくほどの鈍感ぶりだ。これでは、あいつがかわいそうだ。
だが、少し羨ましい。
あいつを嫉妬させる執事が。あいつを悩ませる鈍感くんが。
私には絶対に出来ないから。
そう、その役は私じゃない。
私はただの傍観者だ。
だから、まあ、暖かく、面白おかしく見守るこにとしよう。
ヒロインを助ける友達としてね。
「ちょっ、美希ちゃ〜〜ん」

「んっ、なんだ？」

「なんだじゃあないよう。さっきから話しかけてるんだけど、どうしたの？」

「あっ、すまんすまん！ちょっと考えてごとをしててな」

私がもの思いにふけていた間、泉は何度も私を呼びかけていたようだ。
頬を膨らませ、拗ねるような顔をしたかと思えば、いきなり、大丈夫？なんて聞いてきた。
ふっ、どうやら少し顔に出ていたか。余計な心配をさせてしまったようだな。そんなことないのに。
私はてきとうな返事を返して、時計の方に目を向けた。
昼休みももうすぐ終わる。ハァ〜また授業が始まるのか。正直、めんどくさい。

「そういえば、ハヤ太くんがいないねぇ～？もうすぐ終わるのに。」

私が憂鬱になっていたら、泉が唐突にこんな話題をふってきた。

「どうしたぁ～？えらくハヤ太くんを気にしてるな～？」

「ほへっ！？いや、別にそんなんじゃないよ」

ニヤけながら聞く私に泉は慌てて否定した。顔は必死だ。

「だて、いなかったから、ただ何となく聞いただけだよ～」

更に続く言い訳に、口のニヤケが止まらない。

ハッハッハッ、そんなんじゃ誤魔化せないぞ泉ぃ。そんな顔で大袈裟に手まで使ってるんだ、何かあると自分で言っているようなもんだ。

「わかったわかった。もう言うな。それにしても、理沙の奴は遅いなぁ」

「えっ、あっそうだね。」

話題が変わったからか、胸を撫でおろして私の言葉に相槌をうつ泉。

ハハ、からかいがいのある奴だ。この点はハヤ太くんと同じだな。どちらもイジられ体質で、本当に面白い。

…

ん？

なんだか泉の様子が変わってきた。
さっきまではテンパっていたのに、急にうつむいて考えるそぶりをしたかと思うと、いきなり、

「ねぇ、美希ちゃん！」

と呼ばれた私。
顔が妙に真剣で、さっきまでの慌てようはどこえやら、口をキュッと結んで私の返事を待っている。
私は突然の変わりように、なんだ？としか言えなかった。
それを聞いた泉は、少し不安そうな、悲しそうな顔をしてから、

「んん！やっぱ何でもない。」

と明るく振る舞った。
それに何か引っかかるものがあったが、それを口に出してはいけない気がしたので　「そうか」　とただ返すだけだった。
それからはこの雰囲気もなんなので、楽しい話題で過ごすことにした。
特に雪路の話とか。
泉と話していると、
ガラガラガラという教室のドアが開く音が聞こえた。
理沙が帰ってきたのかな？と思ってそちらを向くと、入って来たのは別の人物。
それは、このクラスの人ではなく、明らかに初めて見る、違うクラスの女子だった。
その人は、何か探しているのか、教室をキョロキョロと見渡している。
ふとっ、目があった。

そして、やはりというべきか、彼女は私の所に近づいてきた。
足どりがぎこちない。緊張しているんだろうか、顔も少しひきつっている。
そんな状態で迫られたこっちはただ立つだけしかできず、何の心構えもしないまま彼女の開口一番を聞くことになった。

「あ、あの～、あ、綾崎くんは？」

そう、だからこの言葉に私は目を丸くした。
このクラスで『綾崎』とは、ハヤ太くんのことだ。そして、この雰囲気だから、やはり…

「ハ…綾崎くんは今はいないよ」

私の返答に、彼女は
「そうですか」とどこか安心したような、残念だったような表情をして、次の言葉を口にした。

「あっ、じゃあコレぇ、渡しておいてくれませんか？」

こうして手にしたのは手紙が含まれているだろう、一枚の封筒だった。
その予想通りの展開に私は
「ああ。」とだけ返し、それを聞いた彼女は、

「ありがとうございます。」

っと笑顔でお礼を述べ、逃げるように背を向けてそそくさとこの教室を後にした。
その間、私の静止画はずっと続いた。泉に限っては、その状態の

まま私の手にある手紙を凝視するばかり。そう、それは不安そうに。
ふぅ〜
全くっと私は少し苦笑する。
どこかの執事くんはほんとに女性に縁がある。ヤレヤレ、これじゃあ、ヒナも泉を大変だ。
そう思うこと数秒。
その時、ガラガラと、また同じ音が聞こえた。
理沙が戻ってきたのだ。
やっぱり変だったのだろう、入って来てすぐに
「どうしたぁ？」とばかりに怪訝しげな顔を浮かべた。
ふっ、じゃあ理沙にもこれまでの経緯を話してやらなければな。
…ビデオの用意もしなければいけないし。
ちなみに、私が理沙に説明している間も泉は手紙から目を離さなかった。どこかのボクサーみたいに白く燃えつきた感じで、ずっとずっと固まっていた。
◇ＨＡＹＡＴＥ
昼休みが終わりに近づくと、外にはもう誰もいない。
僕はというと、次の授業に間に合わうべく、速歩きで教室に向かっている。
本当はもっとゆっくりしたいのだが、時間がそれを許さい。
少し眠りすぎたようだ。
反省
…
だが、やっぱり、してもこの状況は変わらないので今は進むことを優先させる。
なら走れよ！
と皆さんお思いになられたかもしれないが、それでも走らないのは、『廊下を走ってはいけない』という基本ルールを守るため…ではなく、別にこのペースでも間に合わうから。
決して、『やっぱ人間、ハイペースで事を運ぶよりマイペースで

ゆっくりとした方が心身共に余裕が持てる』というこの作者のモットーを忠実に守っているのではないのであしからず。
こうして歩くこと数分。
あの先の角を曲がればあとは一直線で教室に入れる、という所まで来た。

…ここで僕（作者）から説明させていただきたい。
人間の視界は真っ正面から見て約９０度と言われている（ほんとか？）。曲がり角をというものはその人間の視界を壁で多くを奪ってしまう。だから、曲がるまでは、その曲がった先にあるものを見ることが出来ない。よって、“お互い”の進むスピードが速いとどうなるか…

「うわっ！」

「きゃっ！」

角を曲がったら、唐突に前から衝撃がやって来た。
可愛らしい悲鳴がその一瞬に響く。
あまり痛くない胸を少し擦りながら、僕はその声を発した人物を見た。

「イタタタ」

尻もちをついて手で額を抑える少女。

「すみません。大丈夫ですか？」

そう言って、僕は彼女が起き上がるのを手伝おうと、手をそっと差し伸べた。

だが、彼女は僕を見るや否や、
「へっ！」っと一言。
…そのまま静止すること数秒。
彼女は驚きの表情を浮かべ、
「えっ、あっ、あのっ！、そのっ！」
と不可解なことを言いながら、手をあたふたと動かした。
僕にはその行動の意味がわからないので、
「？」
を浮かべるしかなかった。
「あっ、すっ、すみません。ありがとうございます。」
少しして、彼女は素直に手を出してくれた。目元まで伸びた前髪によって顔はよく見えなかったが、どこか恥ずかしそうにしていた。
「いえ、こちらこそ」
彼女の言葉に軽く返して、僕は差し伸ばされた手を握った。
熱が手を通して僕に伝わる。
女性らしい柔らかい手は常温より高く、明らかに熱みがあった。
もしかして、この人は引っ込み思案で、緊張しているんだろうか？
などと考えを巡らせながらも彼女を引っ張った。
そのとき
「きゃっ、」
と上がる可愛らしい声。

それと同時に、前に倒れるように迫る彼女の姿。
トンッと触れる音がして、僕の胸に温もりを感じた。その身体は羽根のように軽く、それが小動物のような印象を与えた。
第三者からすれば抱きつかれたような形に見えるこの状況。ついつい力が入ってしまい、勢いがついて彼女はバランスを崩してしまったようだ。

「えっ、と…」

頭を僕の胸に埋め、支えるように手を添える彼女。そのまま、全く動こうとはしない。

…

…

…

え～、どう、したんでしょう？

…困った。

これは、何でしょう？

頭いっぱいに？が広がった。一体、何？この状況。元を正せば僕のせいでこうなったけど、どうして彼女は離れようとしないんだろう？

と思い悩ますこと数秒。このまま、どうしていいか分からないので、とりあえずは話し掛けることにした。

「あ、あの～」

「えっ、あっ、すすすす、すみません！」

この言葉に彼女は自分の状況を理解したのか、急いで後退し深々と頭を下げた。

「い、いえ、こちらこそ」

こう言っても、彼女は止めなかった。

何度も何度も頭を下げ、その度に、その少し茶色ががった髪が揺れる。

「あっいや、いいですから、いいですから。元々、僕のせいですし。」

そう何度も謝られたら何だかこっちが申し訳ない。お願いですから止めて下さい。

僕の言葉が伝わったのか、彼女はようやく顔を上げてくれた。

この時、僕は初めて彼女の顔を見た。

丸みがある輪郭で、その可愛らしい口と鼻歌が彼女の小顔をより印象付ける。

その整った顔立ちは綺麗というより、可愛いという表現が妥当だろう。

けれど、ここで一番惹かれたのは、そんな彼女の相貌ではなく、彼女の瞳だと思う。

彼女は先ほどの上下運動でまばらになった前髪のすき間から、申し訳なさそうに僕を覗き込む。

髪の色とは異なった、黒真珠のような丸い瞳に、僕は吸い込まれてしまった。

だが、それもつかの間のこと。次の授業の予鈴が僕と彼女の意識を戻した。

キ〜ン、コ〜ン、カ〜ン、コ〜ン

と僕達を促すチャイム。

僕と彼女は

「「あっ」」と呟き、顔を見合わせた。

「は、早く、戻りましょう！」

「は、はいっ！」

とお互いに背を向け、僕達はそれぞれの教室に向かった。

何だか、少し後ろ髪を引かれる思いがあったけれど、授業まであと5分だから、急いで準備をしなければいけない。

チラリと後ろを振り返ると、だんだんと遠のいていく彼女の姿が見えた。

何だか、また会うような気がする、そんな予感がした。

◆第二話【私の名前は〇〇〇です】

「マッカちゃんっ！」

休み時間になると、私の友達その一が楽しそうに近づいて来た。ひまわりのような笑顔を向けながら、手にした教科書をココココとばかりに指さす。

「おせ～てっ！」

「あっ、うん！え～と、ここはねぇ」

ヤッパリさっきの問題だった。　私はここの解答を公式を使いながら簡単に説明した。

フムフム、フムフム、と頷きながら

「へぇ～」や

「なるほどっ」と言葉を漏らすその一。本当に理解しているのかは怪しいけど。

「わぁ～、ありがとう！助かったよ～」

「いえいえ、他に解らないとこはある？」

「あっ、じゃあココもぉ！」

とその一が教科書に解らないとこを赤ペンで印をつけていった。

アレ？ココ解けないならさっき教えたとこも無理なんじゃあ…

「何だぁっ！お前そんな問題も解んないのか」

「うん。あっ！！次は受けるんだね」

「まあな。次は世界史だから、受けても私の睡眠に支障をきたす訳でもないし」

「ハハハ…」

私の友達そのニが横から入って来た。この友達そのニは授業をサボりがちで、単位ギリギリの状態なのにそれを直そうとはしない。だが、どう言う訳か、授業を余り受けないのにテストでの点数は私よりいい。

いいなぁ～（作者の声）

「あっ、そうだマカナ。お金貸してくれないか？いやさぁ、財布どっかに落としちまってね、昼飯がね」

「うん。いいよ。いくら？」

「５０００ぐらいかな」

「五千円ね。え～と、はい」

私は財布の中にある樋口一葉さんを手渡した。

「おっ、サンキュー」

そのお札をヒラヒラさせながら軽く私にお礼を述べるそのニ。その性格が何だか少し羨ましい。

「うん。いいよ。でも、その『マカナ』って言うのは止めて欲しいな」

「なぬっ！私の付けた名前が気にくわないのかぁ」

「つ、付けたも何も、ただ名前を続けて呼んだだけじゃない」

「ハハハハハ、まあ、細かいことは気にするな。男らしくないぞ」

「私は女です！それに男らしくもないです」

そのニの言葉に私は強く返した。どう見ても私は男らしくはないのに、冗談でもその言葉は嫌だ。

私の気持ちを知ってか知らずか、そのニは

「ハハハハハ」と笑いながら

「悪い悪い」と手を上下しながら謝罪を述べる。

うぅ～、それは謝ってないって、てか、謝るくらいなら止めて欲しいぃ～。

「一つ言いたいことがある。」

「えっ、何？」

嘆いていたら、そのニが話しを切り出して来た。

「どうでもいいけど。…いや、良くないか、」

「えっ、何？」

少し真剣な顔つきで、正面から私と向き合う。何故か、その一までもがそれに揃う。

「あのさぁ、私達のこと地の文てその一そのニって紹介するの、止めてくれない」

「あっ、それ！私も私も～」

「あっ、うん、ご、ゴメン」

き、気付かれた。

「それと、作者に私のこともちゃんと紹介しろって、言っといて」

「りょ、了解」

とそこで、次の授業のチャイムが鳴った。

二人は自分の席へと戻っていった。

私はというと、やっと言えたっ！と物語っている二人の背中を、只々見るばかりだった。

「いや～、やっと終わったぁ～」

４時間目の授業が終わると、友達そのニである、月見蒼花（つきみあおか）が私のとこにやって来た。

私は彼女のことを『青ちゃん』と読んでいる。青ちゃんは、その容貌のせいか

「ちゃん付けは止めろ」とよく言うが、私は未だ変えたことがない。
「ならせめて、呼び捨てにしろ」とも言うが、どうにも私は人を直で呼びのが苦手だから仕方がない。
薄い青髪をオールバックにしているが、少しだけ前髪を残している。目は鋭く、中にはヤンキーのようなギラついた輝きがある。その顔立ちは只の凛々しいではなく、男勝りの攻撃的な凛々しさっと言った方が適切かもしれない。
だから、口にはしないが正直なところ、彼女にこの白皇の制服は似合わないと思う。本人もそれを自覚していて、
「私服だったら良いのになぁ」とよく私に言っている。ここに来たのは、お父さんの推薦でのことといつか私に話してくれた。
「たく、あの親父は」とよく言うが、実は青ちゃんは父親思いの優しい娘だということを私は知っている。

「アレ？青ちゃん、今の授業寝てなかったっけぇ」

「寝ていても起きていても、終わった解放感は一緒だろ」

「でも、あと昼からあるよ」

「あっ、あたし昼からいないから」

「えっ、なんで？」

「う～ん、家の用事かなっ」

「あぁ、なるほど」

てっきり、またサボりなのかと思った。

「サボりかと思ったかと思ったか？」

「えっ、いや、そんなことないよ」

うっ、返答に困ってしまった。この友達は自身の目のように鋭いので、よく私の考えを当ててくる。だから、迂濶に考えられない。

「え～～！蒼花ちゃん帰るの～～」

青ちゃんとの会話中、友達その一である、『百衣桃花』（ももいももか）が話しかけてきた。

まあるい目を向け、ガ～ンという感じでこちらを見る。

「おう、ちょいヤボ用。」

「え～～～、放課後三人でカラオケにいこうと思っていたのに～」

そりゃ残念、と青ちゃんは笑った。

桃ちゃんは恨めし目で青ちゃんを見る。その姿が桃ちゃんの容姿と似つかわしくないので、なんだか私も笑ってしまう。

「あ～～、何笑ってるのマカちゃん」

「いや、なんとなく」

う～、と今度は私にその目を向けてきた。やっぱり似つかわしくない。

桃ちゃんの容姿を例えるなら、人形だ。

腰あたりまで伸びた黒髪はさらっとして、絹のような可憐さや繊細さを写し出し、女性にとってはこれほど魅力的なものはないだろう。

顔も初めて会ったときは、日本人形のように整っていて、清楚さの

中に自分の意思をはっきりとするような凛々しさを兼ね揃えた、日本人女性、大和撫子のような印象を受けた。だから、白皇の制服は彼女の雰囲気に合わないとその時思った。だけど、話してみたら

「う〜〜〜〜〜」

こんな感じで。今は子猫や子犬などの小動物のように思う。

「まあまあ、その辺にしとけ。じゃあ、二人でいってこいよ。」

「蒼花ちゃんもいなくちゃ、やだ。」

青ちゃんの提案を桃ちゃんは即答で却下した。それに、私達は頭を傾けた。一体、何故？

「だってマカちゃん上手すぎるから、せめて一人、私より下手な蒼花ちゃんを連れていきたいの。」

エヘン、と胸を張る桃ちゃんに青ちゃんは拳を握り、フルフルと震わした。

「失礼な。私は下手じゃないぞ！」

……

……

……

「「音痴」」

「うるさい！ほんとにお前らは、まったくほんとに…ブツブツブ

ッ」

不機嫌な目でそう呟く青ちゃん。やっぱり気にしているんだね。

そんな青ちゃんに桃ちゃんは、バッサリと切っておとした。

…

「時間はいいの？」

「ッ、…くそ、じゃあな。マカナ！百衣！」

「うん。じゃあね、青ちゃん」

「バイバ～イ」

そんな会話で私たちは別れた。

遠くなる青ちゃんの背中が少し可哀想だった。

その横で桃ちゃんは楽しそうにそれを見つめていた。目と口の笑い方が微妙に合ってなかったのは、きっと私の気のせい。

ふと桃ちゃんは、あっ、といった感じで私に顔を向けた。

「そういえば、さっき薫先生がマカちゃんを呼んでたよ。」

私に？一体何だろう。

「何だろうね☆」

「……あ、じゃあいって来ます」

「うん。いってらっしゃい☆」

私を見送る桃ちゃんの笑顔が何故か私は怖いと思った。

一体何故だろう…

◆◆第三話【これが私の初コイですか？】

◆◆◆

薫先生の用事は、次の時間にある体育の授業のことだった。授業の場所の変更と体育に使用する道具を予め用意してくれとのこと。

正直…嫌だ。

別に頼まれ事が嫌というわけではない。次の体育が憂鬱なのだ。

私は運動時、必ず怪我をするという特殊能力を持っている。それは一ターンに一回発動してしまい、私の能力値に関係無く、スリ傷やら突き指やらを毎度毎度してしまうのだ。だから、体育は嫌。しかも今日の体育は武道となり、種目は剣道となる。最低、突き指は覚悟しとかなければいけない。

ハァ〜、私も青ちゃんみたいに帰りたい。

そんな事を思ながら剣道場に向かっていたら、私の真ん前に一筋の黒が映った。

それは、蝶だった。

風に踊り、葉と共に舞うその蝶は、まるで私を誘うようにヒラヒラと羽ばたき、飛んでいた。羽には何か模様のようなものがあり、光の粒子を私は見た。

なんて綺麗な。

「あっ、待って。」

気がついたら、私は蝶を追っていた。

蝶の軌跡を辿る光の粒に導かれながら、私は後に続いた。決して遅くはない、だけど、追えなくはない速さで蝶は私を誘う。

―こっちにおいで―

多分、言葉を出したらこう言っているのかもしれない。

私はついていった。何故ついていくのか私自身、理由は判らない。

それが只の好奇心なのか。もしかしたら、私は期待しているのかもしれない。行き着く先に何かあることを。
先には白いベンチが見えた。
目的地に着いたのか、蝶はその高度を下降し、そのベンチにある水色に着地した。
そこに居たのは一人の少年だった。
◆◆◆
蝶はそこで動きを止めた。母の胸に眠る赤子のように私には見えた。
少年は何も動こうとはしなかった。そ〜っと正面に周ってみると、眠っていたのだ。

「あっ…」

心が漏れた。
なぜなら、そこだけが何か違うセカイだったからだ。穏やかな空気がその一体を包み込み、時より流れる風が少年の髪を揺らす。
私は少年の顔を見た。
―綺麗な人だなあ―
穏やかなその寝顔は安らぎの象徴。清楚さを伺わせるその立たずまいや、女性のような端正な顔立ちは、その場所と絵を作っている。
題材は女神。眠気に誘われ、一時(ひととき)の休息をおくるその女神は、規則正しい寝息を奏でいる。

―スゥ〜、スゥ〜―

ほんとに気持ちよさそに、眠っている。
私は正面で彼を見ていた。そして気がつくと彼の顔が真ん前にあった。どうやら、無意識に接近し過ぎたらしい。彼と私の間には３０ｃｍも距離がない。

「ん…」

!!!

彼が起き始めた。

「わっ、わわわ」

どうしよう、どうしよう。え～と、えと。か…隠れなきゃ！

私は急いで物影に隠れようとした。だが、あろうことか、ここで私の特殊能力が発動してしまった。

「ふにゃ！」

転んでしまった。

つまずく石もないこの場所で、見事に転んでしまった。今日は顔のスリ傷だった。

—かっこ悪い。

みず知らずの女が自分が目覚めたばかりのところにうつ伏せになっているのだ。彼はどう思うだろう。

うぅ、どうしよう。

変な人だと絶対に思っているはずだ。

私は恐る恐る、顔を上げた。

「大丈夫ですか？」

私の予想とは反して、彼は私に手を差し伸べ、笑顔で私を向かい入れてくれた。

「あ…、あっ、はい。大丈夫です。」

突然の事で声が少し裏返ってしまったが、そんな醜態は気にもせず、彼は私を引っ張ってくれた。

「あ、ありがとうございます。」

「いえいえ、お気になさらず。」

ドキッとした。

絵を作っていた人物と、私は話をしたのだ。

絵画から出たその笑顔は、寝顔とはまた違う、魅力的なものだった。

「あっ」

「あっ、はいいっ！」

彼の一声に私は現実に立ち戻された。

彼はポケットからバンソウコウを取りだし、それを私の頬につけてくれた。　彼の手が私の頬に触れる。

きっと私の顔は凄く赤かっただろう。自分でも熱が伝わるのが感じられたぐらいだから。

「はい、これでよし。女の子が顔に傷を付けたらいけませんよ。」

「あ……ハイ。気を、付けます。」

確信した。

多分、これが私の初恋なのだ。

◆◆◆

あれから彼と別れる間、ずっと私達は話しをしていた。彼は最後まで私が何故ここにいたのかを聞いてこなかった。配慮してくれたんだ。だから、そんな彼その優しさが嬉しかった。

予鈴のチャイムが鳴り、私達は別れた。

浮かれていた私はその時まで、お互いが自己紹介をしていなかったことに気が付かなかった。

後日、青ちゃん聞いてみたら、彼は『綾崎ハヤテ』というらしい。三千院家の執事で色々な特殊能力をもつガンダムの生まれかわりだとのことだ。

私はガンダムのことは良く判らないけど、彼のことを良く知りたいと思った。

だから、それから私は彼を目で追うようになった。廊下で見かける時。体育の授業の時。授業そっちのけで私は窓の方ばかりを見ていた。

朝、登校した時も、真っ直ぐに自分の教室に入らず、遠周りをしてでも彼の教室の前を通った。

青ちゃんによく冷やかされた、

「お前それはストーカー」と。

青ちゃんは最初は

「まったく、あんな貧相な男のどこがいいかね～」とバカにしていたが、私の猛烈な反論に目を丸くし、それからは私に協力してくれるようになった。

そのおかげで、私は彼のことを色々と知ることが出来た。

そうした日々を過ごす内に、私の心の内にある想いは、ジリジリとその熱を上げいった。

やっぱり、私は彼が好き。だから、私だけでなく、彼にも私の事を知って貰いたくなったのだ。

私は手紙を書くことにした。

いわゆる、『ラブレター』というやつだ。
いきなり合って告白したら、彼も混乱してしまう。まずは手紙で少しだけ私の事を知って貰って、それから告白をする。
よし、ファイトだ私！
この想いを伝えるために頑張れ！私！

その決意を胸に、私は手紙を書き上げた。
明日が、決戦だ！

最後に手紙の表に、名前を書いた。

『間（あいだ）　可奈（かな）』

と。

番外編【初デート！？】

今、１０時５０分。
彼との待ち合わせまであと３０分もある。
私はガラスに映った自分の姿を念入りにチェックした。
目のクマもないし、寝癖の跡もちゃんと直した。それに今日の私は人味違う。青ちゃんの情報によると、彼の好みは年上お姉さんらしい。だから、今日はいつもと違う、大人のお姉さん系みたいにしてみたのだ。

今日の服装は、主に黒で攻めてみた。黒のパンツに黒のシャツだ。上には少し仕掛けがあって、服の胸の当たりには白の線が二本に、文字が入っている。これにより、桃ちゃんほどではないでも、決して無いほうではない私の胸を強調した。
少しでも大人っぽくしたかったから。

少し笑ってみる。
うん。別に変じゃない…と思う。
昨日の私は誰もおかしいと言うほど変だった。青ちゃんや桃ちゃんからも言われたし、自分でも自覚があった。
判っている。判っているのだ。自分が何故こんなにもおかしいかなんて。
でも、しょうがないじゃなではないか。

だって今日は、彼との初めての『デート』なんだから。

今からでも、私の胸、ドキドキしてる。

早く会いたい。だけどまだ、彼が来るまでこの気持ちを味わいたい。そんな矛盾が…心地良い。

ふと、前にいる女性を見た。

私は周りとは違う雰囲気を感じた。

彼女は時計に目をやり、時間を気にしている。

誰かを待っているのだろうか。もしかしたら、デートの待ち合わせかもしれない。そう思うのは、何故か彼女が輝いていて見えるからだ。

―ふふふ、私と同じ―

だけど、多分少し、私とは違うんだ。

彼女が羨ましい。

私も彼女みたいに輝いて見えるといい、いや…見えるはずだ。

だって、こんなにも私は、こんなにも…彼が好きだから。

だから、きっと、そうなっているはずだ。

ふとっ、時計を見て見る。針は１２を刺していた。

あと２０分。

ーふふふ

やっぱり、この気持ちは堪らない。

だけど、やっぱり、一番は……

「すみません。遅くなってしまって」

彼に会える時だ。

彼は私が先に来ていたので、慌てて謝ってきた。

別に謝ることではないのに、彼は真面目だ。これが青ちゃんならば、３０分遅れておいて『お待たせー』の一言の後に『行くぞー』だ。正直、困ったものだ。

「えっ、いいですよ。別に。私も今来たとこです。」

定番である。だけと、実は言ってみたかったりする。彼は申し訳なさそうにして、

「ありがとうございます。」と言ってくれた。

やっぱり、彼は真面目だ。

「こちらこそ、ありがとうございます。わざわざ、『付き合って』貰っちゃって。さあ、行きましょっ」

私は歩き出した。
彼も横に並ぶ。

「それで、今日はどういって物を買うんですか？」

「はい。ネックレスにしようと思います。」

そう、笑顔で私は言った。

突然、男が前を横切った。

「お待たせ」の一言に自然と視線がそちらに向かう。

そこには先ほどの女性がいて、彼を見るや否や笑顔で迎え、彼の腕に自分の手を絡めて歩き出した。

ーやっぱり…違う

私はその光景をじーと見ていた。彼の言葉に気がついた私は、何でもないことを伝えた。

「今日はよろしくお願いします。」

「はい。まぁ、僕が選んだので『弟』さんが喜んでくれたらいいです。」

「大丈夫です、ハヤテさんなら。」

彼女が羨ましい。
まだ私はその位置じゃないから、だから…羨ましい。
でも、いつかきっと『本当』になってみせます。
「じゃあ、いきましょっ。」
「はい。」
彼は笑顔で返してくれた。
ーあぁ
まだ、私は、その位置じゃない。判っている。でも、せめて今日ぐらいは…

私は歩きながら、彼の手をそっと握った。

今はまだ…ね。

end

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8741c/

あの風の人に

2010年10月9日05時09分発行